

## ソフサンデイスの音楽会

志村 良知

アラウンド・セブンティの学生時代の仲間五人で作っているギターの合奏団『ソフサンデイス』が、コロナ禍を越え三年越しで第一回発表会に漕ぎつけた。発表会といっても観客は昔の仲間の計七人、小さなカフェを借り切つての軽食とアルコール付きの同窓会である。

クラシックギターは本来独奏楽器であるが二重奏や合奏も楽しめる。合奏の場合、主旋律、裏旋律、リズムの三部が基本となる。今回はこの基本の三重奏が二曲、二重奏に第二の裏旋律を増やした四重奏が五曲だった。

ギターの音域は三オクターブ半しかなく、狭い音域に音色の同じ楽器がひしめくのできれいな合奏曲とするための編曲は難しく、曲目すべてがNの師匠のプロの手になり、どこを押さえるかの運指も指定されている。

私のパートは裏旋律。主旋律は二人で弾くので、四重奏曲では他の三パートは一人ずつとなる。家で練習していると家人が「調子外れ」と揶揄する不思議な抑揚の連続の裏旋律は、合奏では主旋律を引き立て、リズムとも合わせて曲全体のバランスをとる。担当奏者には音楽的センスが必要である。

家から五分の距離に住むNに合奏をやらないかと誘われた三年前には、私は事実上ギターを弾くののを止めていて、迷惑になるからと断った。しかしNは遥か松戸に住む名手Hも誘っていてその勧誘は強引だった。三人で練習を始めてすぐNの奥さんが加わり、川崎在住のY子さんが加わった。私を除く四人は卒業後も先生についてギターを続けているこの道五十年の手練ばかりである。始めた頃の練習では楽譜通りに正確に出てくる音の美しさと大きさに圧倒された。付いていくには練習の積み重ねしかない。コロナ禍での合奏練習の中断期間は、良いリハビリの時間であった。合奏曲の傍ら、複雑な難曲にも挑戦して運指やリズムに慣れるようにした。

発表会は仲間内でアルコールが入った事もあってやんやの大喝采。帰り道、Nは次回発表会での候補曲について熱っぽく語り続けた。